卒業論文の要旨

論文題目	大学生の死生観形成と創作物の関連性について
氏名	壹岐日南子
メジャー	哲学、倫理学

（要旨）

本論文では、大学生が創作物に触れることで死や生についての考え方はどのように変化するかについて考察することを目的とした。青年期は、死や生についての考え、すなわち「死生観」を養うためには重要な時期であるとされる。しかしながら現代においては、死に対する話題がタブー視されていること、死生観養成教育の少なさ、実際の死別体験の有無の差などにより、大学生が死や生について実体験として考える機会は多くはない。他方で、大学生の死生観に大きな役割を果たしていると考えられるのが、「フィクション」である。実際先行研究は、大学生の死生観に影響を与えたものの一つとして、フィクションに言及している。死を目の当たりにする経験の少ない大学生は、より身近で日常に馴染んでいるものから影響を受けているのではないか。そこで本研究は、大学生は創作物(フィクション)からの影響を受けながら死生観形成を行っておりが、そこで死や生についてヒントや新たな発見を得ていると仮説を立て、質問紙調査を行った。

質問紙調査は、ある私立大学の大学生 45 名を対象に行われた。質問において「創作物を通して死や生について考えたことはあるか」、「創作物を通して死や生についてのイメージはどのように変化したか」などを尋ねた。その結果、創作物を通して死や生について考えたことがあると回答した人は過半数を超えていた。一方、創作物に触れる前と後とで死や生についての考え方はどのように変化するかについては、個人差が目立った。具体的には、創作物に触れることにより死への恐怖が緩和されるか強調されるかの違いがあった。すなわちフィクション鑑賞において、死を恐怖として描かれた場面に共感した場合には鑑賞者は死が恐ろしいと考える傾向を強め、死は怖くないものという描写に共感した場合は死への恐怖が緩和されていた。さらには、創作物に触れたことにより今後どう生きていきたいかが定まったという回答や、自分を受け入れ前向きに生きたいという生への肯定的な意見が集まるなど、創作物に触れることによって回答者たちに死や生についての捉え方に変化が生じていた。

本調査において、大学生の死生観形成には創作物から与えられる影響が関係しているということが分かった。若者は、死を論じたり、身近な人の死に直面する経験が少ないものの、創作物を観賞することによって、死生観を深めているのである。本研究の主張をさらに補強していくためには回答サンプル数を増やしていく必要があるが、それは今後の課題としたい。

（指導教員の推薦のコメント）

本研究は、青年期の若者、とりわけ日本の大学生に対して、創作物・フィクションが死生観に与える影響について調査したものである。 青年期は死生観形成において重要な時期である一方、若者は死生観を養うためのライフイベントに乏しいという問題がある。本研究はそこに着目し、綿密な質問調査を通じて、大学生が創作物・フィクションを通じて死生観を深めていることを明らかにすると同時に、 死生観形成における創作物の重要性も示唆しており、 極めて興味深い。 本研究を優秀卒業論文として推薦する。